

杵淵 博樹 著

『人類は原子力で滅亡した～ギュンター・グラスと「女ねずみ」』

依 岡 隆 児

本書は、ギュンター・グラスの小説『女ねずみ』（1986年）をこの作家の作品史のうえに位置づけ、物語構造上の特性を手掛かりにしながら、そのテーマと物語との関係を問い直そうとする著作である。

まずなにより、グラスの作品中でも恐らく最難関であろう小説『女ねずみ』を果敢に取り上げ、論考を試みたことを評価したいと思う。グラスは八〇年代になって南北問題や環境問題、西ドイツへの核ミサイル配備などを前にして人類滅亡を予感し、その危機感のあまり書けなくなるという深刻な状況に陥っていた。そのような作家にとってターニングポイントとなったのが『女ねずみ』だった。したがって、この小説を正当に位置づけてこそ、グラスの創作活動の全体像は捉えられると言っても過言ではないだろう。本書がこの作品に絞って考察したことの意義は大きい。

また、第一章の研究史概観では著者は膨大な先行研究を丹念に検証し、手際よく整理してみせている。注の詳細さも評価できよう。第二章以降では、先行研究を整理したうえで、グラス研究において手薄な部分を見出し、それをテーマとして取り上げて、独自の観点を示している。語り手の「ヒロイズム」と物語との関連やジャーナリズム的リアリティの援用、テクノロジー批判、死の集団性と個性性など、「人類の滅亡」という作品テーマに向けての新しい切り口を意欲的に提示していて、テーマ設定にオリジナリティを感じさせる。

『女ねずみ』はこの「人類の滅亡」というテーマに文学的リアリティを与えながら、その危機的状況の中で集団としての死に抵抗して「個別の死」を追求しようとしてきた、というのが著者の主張である。語り手が「個別の死」を追求するうちに、結果として人類存続の条件を逆説的に明らかにすることとなる。「文学」とは人類を存続させるはずのこの「個別の死」を語るものであり、そうした「文学」そのもののあり方を問いかけるのがこの小説だったと、著者は最後にまとめている。

以上のことから、本書は斬新なテーマ設定と粘り強い論考を有するすぐれた業績であると、私は思う。ただ、いくつか気になった点があったので、それらの点を含めて、以下、本書の内容をいま少し具体的に見ていくこととする。

第二章の「物語内容と語り手」では、著者は語り手の分析を通して物語のダイナミズムを考察し、『女ねずみ』が語り手の物語行為における身体的存在感の希薄さが極に達した作品であることを明らかにする。そのうえで、この身体的存在感の希薄さゆえに、語

り手は自由に物語を展開できたのだと主張している。

たしかに、グラスの諸作品における語り手と物語内容との関係を検討している点は興味深いが、ただここでいう「ヒロイズム」という概念がややわかりづらい。グラスの創作活動のなかで『女ねずみ』が分岐点を成しているという指摘はなるほどその通りだと思うのだが、こうした語り手の特徴を「ヒロイズム」という言葉で分析することに、私は違和感を覚えたのだ。これは語り手の身体的存在感が希薄化するなかで発揮される「突出した奮闘」とされる。そして「何度否定されても、自分の物語を語り続けようとする執念、語りなおそうとする執念であり、人類の存続にかける頑固な意志」(108頁)を特徴として持つというのが、要するに語り手の物語行為への強いこだわりということではないだろうか。それを「ヒロイズム」と呼ぶと、言わんとするところとずれるように感じた。

次に、第三章の「物語世界のリアリティとジャーナリズム」では、作者が物語世界のリアリティを生み出すために、広義の「ジャーナリズム的リアリティ」を援用していたと著者は分析している。この「ジャーナリズム的リアリティ」が、作者が物語を広く設定していく際に支えとなる役割を担っている、というのだ。

たしかに、ここでメディア的言説とグラスの文学との関係を取りあげたことは重要な成果ではあるが、この「ジャーナリズム」という概念自体が少しわかりにくい。それは、この概念が広く設定されすぎているからではないだろうか。「資料・調査に基づく報告形式」(130頁)という意味のようだが、報道、マスメディア、ビデオ、報告一般などかなり広い意味で使われていて、その分、焦点がぼやけてしまう印象を抱かされる。また『女ねずみ』以外のグラス作品についても、この「ジャーナリズム」という観点からそれらを彼の作品史の中で位置づけようとするあまり、分類がクリアになりにくい。やや性急に図式化してしまったようにも感じられる。欲を言えば、この点に関しても個々の作品に即して、もう少し丁寧な考察があってもよかったのではないか。

第四章の「非日常的テクノロジーと日常的身体感覚」では、著者はクリスタ・ヴォルフの小説『原発事故』(1987年)を引き合いに出して、この作品でもグラスの場合と同様にテクノロジー批判が展開されていると指摘している。

第四章はこのように、『女ねずみ』とヴォルフの『原発事故』との比較を試みており、ユニークな論考となっている。むしろ、この二つの作品を「テクノロジー批判」という観点で論じることにとどれだけ妥当性があるのかと、疑問に思われる向きもあるかもしれないし、私自身も当初はそう思っていた。しかしながら、八〇年代において西ドイツへの核ミサイル配備や環境問題の顕在化、チェルノブイリ原発事故などで危機が深刻化し、人類絶滅の可能性も取り沙汰されるようになったのであれば、同世代の二人の作家がこうした問題を取り上げたことになんらかの関連があると考えるのは自然である。やはり二作品の比較考察は一考に値するだろう。本章はこの点、テクノロジー批判を行う両作品がメルヒェンの使用や語り手の設定などの共通点を持っていると指摘していて、説得力があった。その一方で、両者の差異についても、もう少し分析があれば、それぞれの作家の創作上の特異性が際立って、なおよかったのではないだろうか。

最後に、本書の構成について触れておく。博士論文をもとに、それを加筆修正してこのほど出版した本書は、グラスの小説『女ねずみ』を考察した本格的な研究書であるが、同時に彼の創作活動を概観できるようにしたグラス入門書でもある。今回加筆された「序章 作家グラス誕生から『女ねずみ』まで」と「終章 『女ねずみ』以降」では、略歴や作品史が一般読者にも親しめるように記されている。グラスという作家の全体像をわかりやすく示す工夫が見てとれよう。

むろん、研究書と入門書というのは性格上、相容れない要素を持つものだ。そのため本書も多少ぎくしゃくする印象を与えるが、この二つの要素を融合しようとする試みは、評価されてもよいのではないだろうか。またこうした構成があればこそ、特定の小説を元にしながらも、時代の中でグラスの文学を位置づけることが可能になったとも言えるだろう。

以上のように、グラスの小説『女ねずみ』を論じる本書は、個々のテーマの取りあげ方が大胆でありながら、粘り強い考察と緻密な分析がなされている労作である。たしかに、ときに網羅的に論じようとするあまり、コマ切れになり議論が拡散する箇所もあったが、個々の分析は丹念になされており、作品に向き合う誠実さを感じさせる。この点で、本書は評価に値する業績となっている。

ことにグラス最難関の小説をここまで読みこんで分析し、さらに現代社会との関わりで歴史的にも位置づけようとした点は、本書の大きな功績である。またその作品はすでに現代の古典とされている一方で読みづらい作家であるとレッテル貼りされがちなギュンター・グラスについて、そのアクチュアルな側面を再評価し、一般読者の関心を喚起しようとした点も、評価されるべきであろう。

奇しくも、博士論文完成後に、東日本大震災とそれに伴う福島原発事故が日本を襲い、この杵渕氏のグラス論でテーマに据えられていた「原子力」技術の暴走が、喫緊の課題としてクローズアップされることとなった。こうした状況が博士論文を元に本書を執筆する氏のモチベーションを著しく高めたことは想像に難くない。本書のテーマ自体も、読者諸氏の関心をひくことであろう。広く読まれることを願いたい。

(早稲田大学出版部 2013年)